

奈良県の中世軍事勢力に着目した城郭遺構における
テンナンショウ属植物の分布

種坂英次

近畿大学農学部農業生産科学科

**Distributions of *Arisaema* species (Araceae) in ruins of fortresses
in Nara Prefecture, focusing on military influences in Medieval Japan**

Eiji TANESAKA

Department of Agricultural Production, Faculty of Agriculture, Kindai University

Synopsis

Distribution of plants in the genus *Arisaema* (Araceae) in ruins of fortresses and their relationship with medieval military influences in Nara Prefecture were investigated. In 13 of the 25 ruins surveyed, a total of 5 *Arisaema* species were observed. These were widely seen in the ruins of fortresses occupied by the Yamato indigenous powerful clans, but were not found in those of the Tsutsui clan, a congregation force of Kofukuji Temple. These results suggested that in order to understand the distribution of *Arisaema* plants, it is necessary to consider not only the natural environment but also the influence of medieval military clans.

Keywords: *Arisaema*, medicinal plants, medieval fortress, military influences

1. 緒言

テンナンショウ属植物 (*Arisaema* spp.) はサトイモ科の多年草で、湿潤な熱帯から温帯に分布し、世界に約 180 種、日本に 50 種以上が知られている¹⁾。アジアでは古くから根部 (塊茎) を薬用とし²⁾、特に我が国中世には金創 (おもに戦傷) 治療における破傷風予防に用いられた^{3, 4, 5), 6)}。本属種は近畿地方に散在する中世城郭遺構でしばしば観察され、奈良県北西部 (平群町周辺) では里山環境での分布は極めて稀であるのに対して、城郭遺構に集中的に分布している⁷⁾。しかし、城郭管理における薬用植物の利用を示す一次史料は見当たらない。本属種の城郭遺構における集中分布の要因について、生育に適した自然環境を反映するものなのか、近年の文化財保全における除草圧による攪乱の影響なのか、または薬用や茶花としての利用を目的とした人為的な植栽や保全の関与があったかについては明らかではない。一方、和歌山県の城郭遺構では宗教勢力を含めて各軍事勢力が複数の城を掌握していたものの、各勢力の拠点となる城のみに本植物が分布する傾向にある⁸⁾。本研究では、本植物

奈良県の中世軍事勢力に着目した城郭遺構におけるテンナンショウ属植物の分布 種坂

の分布と大和における中世軍事勢力との関連性を知るために、奈良県の城郭遺構での分布を調べた。現在の本植物の分布が中世の人為的関与を反映しているならば、両者になんらかの関連性（分布の有無、分布種の共通性など）が見いだされるかもしれない。

2. 調査地および方法

2020年と2022年の花期（4月から6月）に奈良県北部に散在する複数の中世城郭遺構25地点について、テンナンショウ属植物の分布を調べた（図1）。県内には400基以上の城郭遺構が存在するが、調査はアクセスが容易で歴史的背景が比較的明らかとなっている遺構のみを対象とした。このうち、高取城と郡山城は近世の大掛かりな改修を受け、多聞城は戦後に公立中学校の敷地として開発された。その他の城郭遺構の多くは杉檜の植林地として利用されている。城郭遺構の所在と軍事勢力を含む歴史的背景については、『日本城郭大系』⁹⁾と『図解 近畿の城郭』¹⁰⁾を参考にした。テンナンショウ属種の同定は『日本産テンナンショウ属図鑑』¹¹⁾に従った。

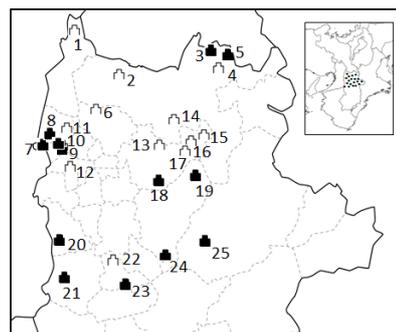


図1 奈良県北部の調査地点(挿入図は近畿地方)。テンナンショウ属植物の有無(黒は有,白抜きは無)
Fig. 1 Map of study sites in northern Nara Prefecture. Kinki district (inset). Present or absent of *Arisaema* spp.: Symbols in solid (present), open (absent).

3. 結果および考察

調査した25遺構のうち、13遺構で計5種のテンナンショウ属植物を観察した（図2）。



図2 奈良県の城郭遺構で観察したテンナンショウ属植物。
(a), ウラシマソウ, *A. thunbergii* subsp. *urashima* (信貴山城); (b), キシダマムシグサ, *A. kishidae* (信貴山城);
(c), ムロウテンナンショウ, *A. yamatense* (高取城); (d), *A. longilaminum* (龍王山城)。

Fig 2 *Arisaema* species observed in ruins of fortresses in Nara Prefecture
(a), *A. thunbergii* subsp. *urashima* (Shigisannjo); (b), *A. kishidae* (Shigisannjo); (c), *A. yamatense* (Takatorijo);
(d), *A. longilaminum* (Ryuozannjo).

ウラシマソウ (*A. thunbergii* Blume subsp. *urashima* (H. Hara) H. Ohashi & J. Murata) は全国に分布し、近畿地方での花期は4月、紫褐色の花序付属体の先端が長く糸状に伸びる。本種は近畿圏の城郭遺構で最も普通に見られる。キシダマムシグサ (*A. kishidae* Makino ex Nakai) は近畿地方を中心に愛知および岐阜に分布する。本種の花期は3月下旬から4月中旬、仏炎苞は葉とほぼ同時に開き、斑入りの葉をもつ個体が多い¹⁾。本種は信貴山城でのみ観察されたが、近隣の古代城である高安城倉跡にも自生する。ムロウテンナンショウ (*A.*

yamatense (Nakai) Nakai) は紀伊山地を中心に近畿地方に広く分布する。花期は 4 月下旬から 5 月、花序付属体の先端は光沢のある濃緑色の円頭形となる。ヤマトテンナンショウ (*A. longilaminum* Nakai) の花期は 6 月、仏炎苞先端が長く伸び、黒紫色の細い花序付属体が前方へ曲がる。本種は龍王山城 (北城) の主郭に群生していた他、まれに信貴山城でも見られた。カントウマムシグサ (*A. serratum* (Thunb.) Schott in Schott & Endlicher) は全国に分布し、花期は 5 月、花序付属体は棍棒状となる。本種は近隣の金剛山系にある上赤坂城 (大阪府千早赤阪村、楠木正成) にも分布するが、奈良県では葛城山系の布施城でのみ観察した。

各遺構を支配した主な勢力と観察種を表 1 に示す。ただし、各勢力の軍事バランス、同盟関係、および城の占有者は、時々の幕府や官領からの干渉によっても変遷した。大和では鎌倉時代から武家による守護職は置かれず、代わって興福寺が守護的な立場にあった。しかし、

表1 奈良県北部の中世城郭遺構におけるテンナンショウの分布
Table 1. Distribution of *Arisaema* spp. in the ruin of the Medieval fortresses in northern Nara Prefecture.

| コード ¹⁾ code | 城郭 fortress | 所在地 locality | 勢力 clans | <i>Arisaema</i> spp. |
|---------------------------|----------------|-----------------|-------------|---|
| 1 | 高山城 | 生駒市高山町庄田字城茶屋 | 畠山氏 | — ²⁾ |
| 2 | 多聞城 | 奈良市法蓮町 | 松永久秀 | — |
| 3 | 柳生古城 | 奈良市柳生下町字古城 | 柳生氏 | <i>A. yamatense</i> |
| 4 | 柳生城 | 奈良市柳生町 | 柳生氏 | — |
| 5 | 興ヶ原城 | 奈良市興ヶ原町 | 興ヶ原氏? | <i>A. yamatense</i> |
| 6 | 郡山城 | 大和郡山市城内町 | 筒井順慶、羽柴秀長 | — |
| 7 | 信貴山城 | 生駒郡平群町信貴山 | 木沢長政、松永久秀 | <i>A. thunbergii</i> subsp. <i>urashima</i> , <i>A. kishidae</i> , <i>A. longilaminum</i> |
| 8 | 赤阪城 | 生駒郡平群町信貴畑南垣内 | 松永久秀 | <i>A. thunbergii</i> subsp. <i>urashima</i> |
| 9 | 椿井城 | 生駒郡平群町椿井 | 椿井氏、松永久秀方 | <i>A. thunbergii</i> subsp. <i>urashima</i> |
| 10 | 平等寺館 | 生駒郡平群町平等寺 | 嶋氏? | <i>A. thunbergii</i> subsp. <i>urashima</i> |
| 11 | 三里城 | 生駒郡平群町三里 | ? | — |
| 12 | 片岡城 | 北葛城郡上牧町下牧 | 片岡氏、松永久秀方 | — |
| 13 | 椿尾上城 | 奈良市北椿尾町城山 | 筒井順興、順慶 | — |
| 14 | 豊田城 | 天理市豊田町 | 豊田氏 | — |
| 15 | 山田城 | 天理市山田町下山田 | 山田氏 | — |
| 16 | 福住井之市城 | 天理市福住町井之市 | 筒井氏 | — |
| 17 | 福住中定城 | 天理市福住町中定 | 福住氏、筒井氏方 | — |
| 18 | 龍王山城 | 天理市田町 | 十市氏 | <i>A. longilaminum</i> |
| 19 | 小夫城 | 桜井市小夫 | 小夫氏、十市氏 | <i>A. yamatense</i> ³⁾ |
| 20 | 布施城 | 葛城市寺口布施 | 布施氏 | <i>A. serratum</i> |
| 21 | 吐田城 | 御所市関谷城山 | 吐田氏 | <i>A. yamatense</i> |
| 22 | 貝吹山城 | 高市郡高取町寺崎 | 越智氏 | — |
| 23 | 高取城 | 高市郡高取町上子嶋 | 越智氏 | <i>A. yamatense</i> |
| 24 | 多武峰城塞群 | 桜井市多武峰 | 延暦寺、越智氏 | <i>A. yamatense</i> |
| 25 | 宇陀松山城(秋山城) | 宇陀市大宇陀春日 | 秋山氏 | <i>A. yamatense</i> |

1): コード番号は図1の番号に対応。 code is corresponding with that in Fig. 1
 2): —: 無し。 absent
 3): 内野和彦氏私信。 personal communication from Mr. K. Uchino

既に南北朝期には興福寺の衆徒 (しゅと、宗徒、僧兵) である筒井氏とともに、越智、古市、十市、箸尾など有力な大和国民 (こくみん、国人衆) が独自の軍事勢力を背景に領国支配を維持していた。この時期、筒井氏は北朝方に、越智氏は南朝方につき、応仁の乱では畠山政長派の筒井氏と義就派の越智氏の間で対立し、他の国人衆もどちらかの勢力に与した。16世紀に入ると各勢力の抗争激化から越智氏の高取城、筒井氏の椿尾上城、十市氏の龍王山城など恒常的な山城が史料に散見される¹¹⁾。さらに永禄2年(1559年)、外部勢力である三好長慶家臣の松永久秀による大和侵攻によって、大和国人衆の多くは松永方または筒井方のいずれかにつき、織田信長の信貴山城攻めによる松永久秀の敗死(1577年)に至るまで両勢力の抗争が続いた。

種坂

松永氏の信貴山城周辺の城郭遺構にはウラシマソウが分布したが、同じく生駒山系にある三好長慶の飯盛城（四条畷市）にも本種が分布している。また、矢田丘陵にある椿井城でもウラシマソウが見られたが、本城は松永氏方による大規模な改修を受けていたであろうと考えられている¹²⁾。国人衆においては、従来から反筒井派で松永方に拠った十市氏の龍王山城にはヤマトテンナンショウ、越智氏や柳生氏の遺構にはムロウテンナンショウが見られた。一方、衆徒の筒井氏においては、椿尾上城や天理市周辺の遺構に本属植物は見られなかった。

本属植物が大和国人衆の城郭遺構で多く見られ、衆徒の筒井氏系の遺構で見られなかったことは、現在の植物分布の有無に関して自然環境のみからは説明しきれない。一方、植物種に関しては低山からなる北西部でウラシマソウ、標高が高くやや冷涼な中南部と笠置山地においてムロウテンナンショウが分布していたことは、自然環境を反映するものかもしれない。ヤマトテンナンショウが群生する龍王山城（十市氏）は、後に松永勢の拠点ともなったが、地理的に離れた信貴山城（松永久秀）にも本種が見られたことは、本種の分布を考察するうえで興味深い。これらの結果は、本属植物の分布を理解するためには、自然環境だけでなく中世軍事勢力の影響も含めて考慮する必要があることを示唆している。奈良県では本研究で挙げた種は該当しないものの、特に園芸的興味をひくユキモチソウ（*A. sikokianum* Franch. & Sav.）をはじめ数種のテンナンショウ属種がレッドデータブックに挙げられている。また、京都府ではキシダマムシグサとヤマトテンナンショウが絶滅危惧Ⅰ類に、ウラシマソウが準絶滅危惧種に挙げられている。近年、城郭遺構は文化財としてのみならず地域観光資源としても注目されているが、特に本属種が抽苔する春期の過度な除草作業によって個体数は確実に減少している。本属植物のホットスポットともいえる城郭遺構について、植生環境も含めた総合的な保全管理が求められる。

4. 謝辞

内野和彦氏（城郭談話会）には奈良県内の複数の城郭遺構をご紹介いただいた。新谷和之博士（近畿大学文芸学部）には本研究テーマについて貴重なご助言をいただいた。ここに、感謝申し上げます。

5. 要約

奈良県の城郭遺構におけるテンナンショウ属植物の分布について、中世軍事勢力との関連性について調べた。踏査した25の遺構のうち13の遺構において計5種を観察した。本属植物は大和国人衆らの城郭遺構に広く見られたが、興福寺衆徒である筒井氏勢力の遺構には見られなかった。これらの結果は本属植物の分布を理解するためには、自然環境だけでなく中世軍事勢力の影響も考慮する必要があることを示唆している。

6. 引用文献

- 1) 邑田仁・大野順一・小林禮樹・東馬哲男. 2018. ‘日本産テンナンショウ属図鑑’ 360 p. 北隆館, 東京
- 2) 江蘇新医学院 (1985) テンナンショウ ‘中薬大辞典 第 3 卷’ pp. 1866-1868
上海科学技術出版社, 小学館編. 小学館, 東京.
- 3) 著者不詳. 14 世紀 ‘金瘡療治鈔’ 明和七年書写. 高知城歴史博物館 山内文庫蔵
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100146757/1?ln=ja>
- 4) 有隣 (14 世紀) 卒急諸病 破傷風 ‘有林福田方’ 内閣文庫蔵版 (明暦版: 復刻
1987) 科学書院、霞ヶ関出版. 東京. 875-876.
- 5) 梶原性全 (14 世紀) ‘萬安方’ 内閣文庫蔵版 (解題 石原明: 復刻 1986) 科学書院, 東京.
- 6) Goble AD. 2005. War and injury; the emergence of wound medicine in Medieval Japan.
Monumenta Nipponica 60: 297–338.
- 7) Tanesaka E. 2017. Ethnobotanical survey on distribution of medicinal plants in the genus
Arisaema in ruins of fortresses used in medieval Japan. *Journal of Medicinal Plants Research*
11: 338-344.
- 8) 種坂英次. 2022. 中世軍事勢力に着目した和歌山県におけるテンナンショウ属植物の分布.
和歌山地方史研究 84: 2-6.
- 9) 村田修三. 1980. 奈良県 ‘日本城郭大系 第十卷’ pp. 281-429. 新人物往来社, 東京.
- 10) 城郭談話会. 2014. ‘図解 近畿の城郭 I’ 475 p. 戎光祥出版, 東京.
- 11) 金井誠. 2014. 城館概要. ‘図解 近畿の城郭 I’ pp. 152-154. 戎光祥出版, 東京.
- 12) 中川貴皓. 2019. 椿井城の構造. 平群町 椿井城跡発掘調査報告書 pp. 88-96. 平群町教育委員会編.